

『吾輩は猫である』禅学

Junko Higasa 2016.5.15

第九章で、前章に登場した哲学者は八木独仙という名で、禅学に傾倒していることが分かる。僧侶・友人たちの記憶によると、漱石は大学を卒業した明治26年に1カ月半ほど鎌倉円覚寺に参禅したという。鎌倉時代に日本に伝来した中国禅宗の開祖は「座禅を修業の中心に置いた」印度禅僧：達磨大師であるが、武家・貴族中心だった禅宗を庶民に広めたのは江戸中期の禅僧：白隠慧鶴はくいんえかくと言われる。その白隠は全国行脚の中で、修行の意味を悟れず「心火逆上」(鬱あるいは神経衰弱)状態になったという。これは『猫』第八章の「逆上」から、第九章の禅の話に繋がる。

白隠は「修行は自分のためにするのではなく、苦しむ人のためにする」と悟ったが、自分のために修行をして「何が何だか分らなくなつて」きちがい気狂になったのが理野陶然と立町老梅である。老梅の言に「鰻が天上する」とあるが、禅宗において「鰻」は欲や煩惱の象徴で、「天上する」は、その際限なき拡張を意味する。そして禅宗の目指すところは「人間すべて公平」であるから、まさに「天道公平」である。

第八章で「逆上」した苦沙弥は、次章で鏡を見る。「自分自身を見つめること」は禅の修行である。従って「自分を見つめ、自分の置かれている立場に気付いている」から猫は苦沙弥を『頼母たのもしい男だ』と評するのである。迷亭の伯父だけは悟っている。